

□書 評□

東大助教授 田 坂 皓 著

選 択 的 血 管 撮 影

大阪大学医学部教授 立 入 弘

臓器または臓器群の血管造影を選択的に行えるようになったのは比較的近年のことである。しかし像の明瞭さ、末梢までの微細血管像を現わしえること、よい実質造影、造影剤の少量使用で足ることから全身的副作用を防止できる点、など、本法のもつ有利さはこの技法を急速に発展させ、その普及も要求されている。

昨年春の日本医学会総会でもシンポジウムの主題に“腹部臓器の脈管造影”がとりあげられ、本書の著者の田坂博士はその重要な部門である膝及び脾の動脈撮影を担当された。同博士ははやくから日本の放射線医学の診断部門で重きをなしているとともに、常に新しい分野を開拓する若さをもった真面目な研究家である。そして、その海外留学の際にも、現在の東大病院中央放射線部副部長の場でも、その臨床的研究の焦点を腺管造影、とくにこの選択的血管造影にしばって努力して来られたのであって、このテーマの本の著者として、これ以上の人は求められないと云っても過言ではあるまい。

本の内容は手技と各血管の選択的造影像の解説とに大別できる。

この造影法の成否、従って診断への有用性と副作用とは、装置と手技殊に後者に左右されるところが非常に大きい。Seldinger 法を中心として、成書の記載、という形よりも、もっと实际的に、この手技の多年の経験者でないと云えないような数々の問題点にわたって丁寧に説明してあることは、これから本法を始めようとするものには有難いことであり、経験者にも思いあたるところが多いであろう。

各臓器血管の造影像の解説は、胸部大動脈と腕頭動脈、気管支動脈、腹部大動脈、腎動脈、腹腔動脈、腸間膜動脈及び骨盤動脈の各部にわかれていて、計100症例の鮮鋭な写真と、そのおのおのに対比した病歴、所見と解釈の集成である。各項については、一般には見られないであろうことを考えて、正常像と解剖との関連をよく説明されているのは周到な注意と云えよう。

肺と肝、膵、脾及び消化管を含む

腹部諸臓器の悪性腫瘍に最も重点がおかれており、これらは気管支動脈、腹腔動脈の項で詳しく示されている。異常な走向と辺縁を示す局所血管、腫瘍内の異常血管増生、腫瘍組織の濃染や動静脈瘻のような癌腫に特有な所見をもつ多数の症例の写真と解説は、診断的確かから治療方針の樹立に役立つことは大きい。その他にも、脈なし病に関連する大動脈炎症候群、腎性高血圧を解明する種々な腎動脈狭窄など興味深いものを網羅してある。

常に尊敬する同学の友、田坂博士の本書は最近出版されたモノグラフの中では出色のものであって、私達に教えるところが多く、その上、何らの抵抗なしに通覧できる楽しい本であり、同時に内科、外科の専門医や一般医家にとっても、非常に親切で、且つ興味深いものであると信じる。

A 4 判・頁474・図91・写真454
¥ 14,000 円 200

医学書院刊